

たは、反革命の英雄であり、新らしき軍閥の頭領であります。あなたは上海において労働者を虐殺しました。これに對して全世界のブルジョアはむろん歓迎の辭を以てあなたを呼びかけるでせう、帝國主義者は、數多の贈物をもたらずでせう。しかし、プロレタリアートが一方に嚴存してゐることを、ゆめ、忘れては下さるな！ 父上、あなたはクーデターによつて一世の英雄となつた。しかし、あなたの勝利は一時的なものと信じます。父よ！ コンミニストは日を逐ふて、戦ひの用意を整へてゐる……」この悲痛な手紙を突きつけられた、裏切者、蔣介石の軍司令部の一行だつた。

二十三

中山服のデモの群れに、支那將校が、瓜で口をもぐぐ、動かしてゐた。市街は、さまざまな傳單の陳列會だ。剥け落ちた朱門の上で、細長い竿の青天白日旗が、大きく風をはらんでゐる。びつこの中津は、山東軍の綿服を、大掛兒に着かへた。彼は城内を出た。そして、張宗昌の落ちのびる列車に乗らず、商埠地にとまつてゐた。

最近、張宗昌は、あの太い頸をねぢ曲げるやうにして、彼と視線がカチ合ふのを避けた。ロシア人

のミルククロフもよくなかつた。いゝのは、第十五夫人の弟の蔡德樹である。中津は、すゞに未練を残して宿州へ出かけて以來、前々から抱いてゐた直感をたしかめた。「やつばし俺れを好かなくなりやつたんだな。」

張は、彼に、ものを云はなかつた。やつて來た旨を述べても、たゞ會釋したのみだ。

「好かなげや、すかなくつてもいゝさ。」と彼は考へた。「人間の好惡の感情は、自分自身でも、どうにも支配のしようがないもんだ。それくらゐのことは俺れにだつてある。分りきつた話だ。」

それでも、彼は、いくらか、やけくそになつた。昔の本性を現はした。張大人に相談せず、臨城で退却して來る將卒をピストルで射殺した。癒る見込のない負傷兵は片づけツちまへ！ といふ命令を出した。

埋められる負傷兵は、

「可憐さうだと思つて下され！ 私たちは、大人のために戦つて、負傷をしたのぢやありませんか。——こんな生きてゐる者を埋めるんですか？」と、憫れみを乞ふた。

「張大人のために負傷をして、張大人のために埋められるんさ。お前たちが大馬鹿さ！」これは、中津が、中津自身に向つて云つてもいゝ言葉だつた。

「それや、不憫ぢやありませんか！ それや不憫ぢやありませんか！」

わい／＼聲をあけて泣き叫んだ。

殺伐な荒仕事は彼の荒んだ感情を感めた。

大人は、何らの謀計もなく、意氣地もなく古い首都へ退却した。そして、二ヶ年半住みなれた、督

辨公署を捨て、しまった。ここを捨てれば全然の没落だ。民心は離反してゐる。張作霖からは、遺責

を喰つてゐる。没落以外に道はない。中津は、それを観取してゐた。

「くそッ！ 今が、あいつとの腐れ縁も見切時かな。」

……彼は、昔の浪人にかへつてしまつた。前線から退却してくると直ちに、猪川の家へ立ちよつ

た。竹三郎が、留置場に呻唸してゐる。家に幹太郎以外、男けがない。これも晝間はゐなかつた。こ

れは、彼に、頗る好都合だつた。暫らく、戦線に出て、すゝを見なかつたことは、彼の氣持を枯淡に

せしめるどころかむしろ、五十の情熱をかり立てるのだつた。

彼の、すゝに對する感情は、老人が、自分の孫にあたるやうな幼い娘を、最後の断ち切ることの出
來ない感情から愛づる。——さういふ氣持になるかと思ふと、ええい、戀のへちまのと、上品ぶつた
まだるっこいことは面倒だ。いつそ、荒療治で、あつさりと無斷で失敬して行つちまはうか？ その
方が面白れえや！ と、この二ツの間を、乗合ひみたいに往復した。彼は、このブラ／＼する自分の
感情を噛みしめるのが愉快だつた。

噛みしめて、そのさきをどうするか、それを空想するのが愉快だつた。

中津の、再度の訪問、これは、すゝにも、俊にも、それ程、恐怖を與へなかつた。

市街の、その行きつまつたところには、河があつた。古代より湧き出てゐる城内の泉からつゞいて
ゐるその水は、音をたてなかつた。丸腰の支那兵が、河馬の群れのやうに、その中へ頭を突っこみ、
濁してゐる。

街の一方は、青鼠の中山服の兵士たちが、蟻のやうに一面に這ひまわつてゐた。他の一方には、土

糞壘の中でカーキ服の眼が光つてゐた。シヤモが蹴あひをやる、その前に、まづ睨めッこをして相手のすきを伺ふ、そののやうだつた。何等奪はれるものを持たない乞食や、浮浪漢は強かつた。

すゞも、俊も、お母も、自分達の家が、中山服の蟻と、乞食、浮浪漢の群れの中に、ボツンと一つだけ、存在してゐるのを知つてゐた。そして、それにおびえた。ほかは皆な支那人だ。

山東軍は、退却際に、行きがけの駄賃として、數ヶ所で金品を奪ひ、むやみな發砲をした。中山服の眼には敵意があつた。不安は、ますますひどくなつた。

馬賊上りの、つはもの、中津の來訪は、この不安と恐怖に、若干の、主觀的な緩和劑となつたのである。中津は、ピストルがうまい。睨みがきく。彼がゐてくれることは、彼女達を心強くした。

石を敷いた狭いゴミだらけの通りを、え體の知れない支那人が、犬のやうにうさんくさくさく行つたり來たりする。猪川の家は、石の重い、壁の厚い、支那人の家でありながら、壁に切りあけた窓と、四國の田舎にありさうな、石の築き塀などによつて、すぐ支那人の住家とは見分けがついた。すゞも、俊も、母も、長い、フゴフゴとした支那服を見ると、そのポケットに、ピストルをしのぼしてゐる氣がして、無氣味だつた。そして、誰れかにすがりつき度いやうな、あこがれにも似た不安を感じた。

中津は、この家のあつさりとして、華やかな、日本娘の着物や、四國訛のある日本語や、若々しい雞の胸肉のやうに軟らかい、ふるひつきたくなる娘の肉體を、視覚で、享樂しながら、一家の不安に同感し、心配けな顔をしたり、また、特別、力になつてやるやうなことを云つたりした。

お仙は、中津が、朝飯を食ひ、晝飯を食ひ、晩飯を食ひ、夜おそくなるまでゐて呉れるために、心細い財布をはたいて物惜みをしなかつた。

俊は無邪氣だつた。

すゞは、ほかの第三者に對するやうに、こだはらない、馴れ／＼しい態度で、中津に向はうとする、氣骨が折れた。何故か、顔が紅くほてつた。中津が強盜、殺人、強姦などをやつてきた、そして多くの人々から、恐るべき蠅として、嫌はれ、おつかながられてゐる。にもかゝはらず、實際は、滑稽な、おかしい、快活な微笑の持主であることは、以前と變らなかつた。これは、すゞにとつて、奇怪で、同時に快よかつた。しかし、中津は、やつて來ると、玄關に這入つた瞬間から、歸へりに、觀音開きの門を出て、なほ、も一度、あとを振りかへるその時間まで、十二時間でも、十五時間でも、その間、一分間も、彼女の、顔や、頸や手から、微笑を含んだ、怖けな眼を離さなかつた。それが、

すゞには、窮屈で、息苦ろしかつた。

その執拗な視線は、彼女が、用事をして、こちらからは、彼を見えてゐない時にも、やはり注がれてゐた。そのことを、彼女は感じた。

ときどき、彼女は、どうかすると、中津の濃い毛だらけの頑丈な二本の腕が、うしろから無遠慮に自分を抱きしめて、首筋のあたりを、熊のやうになめやなしいかと氣にかゝつた。ぞつとした。

兄がゐないと、なほ、この恐怖は強かつた。母もなくなるゝと、恐怖と危険は、もつと、もつと身

に迫るやうな氣がした。
すゞは、妹と、歩きかねる甥とを頼りにするやうな心持になつた。小鳥のやうに、隅の方にうづくまつてゐた。

幹太郎は、この一家を襲つてゐる二つの恐怖を感じた。同時に、妹も母も、支那兵の亂暴に對する強迫觀念のやうなものは、戦慄する程強いが、中津の恐ろしさは、女達が、殆んど意識してゐないと思つた。殊に、それを氣にとめてゐないのは母だつた。それが、彼は不満だつた。母は、わざと、中津を家に引き入れてゐるやうに見えた。彼は母と對立した。その氣持は、知らずく、言葉となつ

て母が感じたかもしれない。

ある晩、マツチ工場の社宅に、六疊の物置が一と間だけ、あけて貰へるから、そこへ金目のものだけを持つて避難してゐてはどうか、と話してゐた。母は、突然、中津を好きやこのんで家へ引つぱりこんでゐるのではないんだ、と云ひだした。幹太郎は、その鋭鋒が、自分にあたつて來るのを感じた。

「一體なんで氣持をこぢらしてゐるんだらう？ お母が、中津と通じたとでも、俺れが、一度でも、もらしたためしがあるんか？」と幹太郎は思つた。「馬鹿らしい、見當ちがひだ！」

彼は、こんな場合の例で、黙りこんでしまつた。

「嫌ひなら、なんにも、社宅へなんか行かなくつてもいゝんだ。」

彼は、簡單に云つた。それ切り黙りこんだ。母は、ヒステリックに、嫁に來て以來、竹三郎のことや、お前達のことを心配しない日は一日だつてないんだ。それを、支那へまでやつてきて、こんなツラさをするのは一體誰れのせるだ！ と泣き狂ひになつた。

變に、家の中の機構が、トンチンカンになつた。

翌晩、幹太郎は、妹がゐるところで、

「いつまで中津先生、逃げ出さずに止つてゐるんだい。捕虜ンなつちまふぞ。」と云つた。

「もう、張宗昌について行くのはやめたんだつてよ。」

「何故だい？」

「何故だか知らないわよ。」と俊は、工場から、途中を推何されながら歸つてきた兄に答へた。「ずつと

ここに止つてゐるんだつてよ。」

「いつそれを云つてゐた？ いつそれをきいた？」

「界首から歸つた日にさう云つてゐたわよ。もう一週間も前に。——兄さんきかなくつて？」

「俺れが、何をきくか！ 貴様、なぜ、それを俺れにかくしてゐた。」彼も、ヒステリックに嘸鳴つた。

「——あいつがいつまでも、ここに止つてゐるのは、(彼は、ますくいらくしながら)すゞをつけねらふとてだぞ！」

「いやだわ。」俊までが、パツと紅くなつた。「そんなことを云ふもんぢやないわ。」

「馬鹿！ 馬鹿！ 貴様ら、親爺が、まだ出て来られないのを嬉しがつとるんだらう！」どうしたのか、幹太郎の機構までが狂つてしまつた。二人の妹を睨んで、蹴とばすやうに嘸鳴りつけた。「親爺と

俺れがゐないから、あんな奴が、のさばりこんでけつかるんだ！ それが分らんのか！

「爹呀！ 爹呀！」

何も知らない一郎が、幹太郎の膝によつてきた。

二十四

塵埃ッほい通りの一角に、露天店が擴けられた。

支那人は、通りと同様に、赤銅色に塵埃をあびてゐた。店が財産である。露店のうしろには、半分出来さしの支那家屋ががらんとしてゐた。

青鼠の中山服の群れが通りかゝつた。半信半疑で警戒を怠らなかつた赤銅色の賣手は、店をたゞひまはなしに、忽ち、中山服に取りまかれた。わめき、罵言、溺れるやうな死ものぐるひの手と脚のものがき、屋臺の顛覆……哄笑に腹を波打たして、中山服は散らばつた。皿と箸にもまれてゐた一ツの茹卵も、一と切れの豚肉の油煮も残つてゐなかつた。

中山服は、街をとびくして歩きながち、快活に口をもぐくさした。向う側の通りでは、カーキ

服が、棘のある針金を引つばつて作業をつけてゐた。睨みあつた。こちらが睨む。向うが睨む。石が飛んだ。

その時、西はづれの、三倍の抵抗力にやり直した堅固な土囊壁に、はまされた細い通りで一人の支那人をつれた日本人が、着剣の歩哨に咎められてゐた。

「君は、どうも、日本人ではないらしいぞ。」歩哨は、剣をさしつけた。「あんまり支那語がうますぎるぢやないか。」

「私は、日本人でしゆよ。」

「さうかね？」垢まぶれの歩哨は驚いた。

「本當に、日本人でしゆよ。」

その男は、下の前歯が、すつかり抜け落ちてゐた。

「そのチャンコロは何だい？」

「こいちゆは、そのう、今朝、工場をぬけだしゆた、不屈な工人でしゆ、今、しよいつを……」齒がないために、ふわ／＼して、發音がうまく出なかつた。二挺の劍が、胸さきで光つてゐる。小山は

汗を拭いた。それがかへつて歩哨の疑念を深めるのだつた。軍隊といふものは、非常に有がたいものである。が、一ツ間違へば頗る恐怖すべきものである。小山は、慌て、自分が燐寸工場の職長であること、逃亡を企てた工人を捕まへに行つたこと、自分の工場にも兵タイを泊めてやつてゐることなどを説明した。しどろ、もどろだつた。

一方の、しつかりした顔つきの歩哨は、それでは、小哨長のところまで行つて呉れ、と通りのさきの狭ッ苦るしい暗い支那家屋につれて行つた。歩哨の疑念は晴れぬらしい。カンテラの光に、兵士たちが蠢めいてゐた。

「軍曹殿！ こいつ南軍の密偵であるかもしれません。顔つきと、言葉が随分あやしいんであります。」面倒なことになつてしまつた！ 小山は、あれだけ工場で軍隊を世話してやつてゐながら……と、何か矛盾するやうなものを感した。

「いよう、どうしたんです？」聞き覚えの聲が暗い隅の方からだしぬけに呼びかけた。

「あ、山崎（しやきと出た）さん！」小山は、すぐ密偵の山崎だと悟つた。助かつた！

彼は、歩哨への面あてに、特に、山崎と親しいことを見せつけやうとして、蠢めく兵士達を横柄に

またいで握手した。

黒い支那服の山崎は、同様な支那服の中津と並んで、片隅の、眠むけな軍曹の前の長い腰掛に腰かけてゐた。

「どうしたんです？」

「この兵タイら、これや、わっしゆの工場で厄介を見とる、あの兵タイぢやないんでしゆね。」如何にも兵士など、わしの風しにも立つべき奴等なんだ！ と云はぬばかりの語調で小山は口を切つた。彼は、朝、早くから、逃亡した工人を追つかけて、汚穢物乾燥場の、汚穢の乾物を積重ねてある席俵のかけに、すなんでゐたのを掴まへてきた話をした。

「あれでしゆよ。あいつでしゆよ。」

入口で、眼をウロ／＼やりながら、慄へてゐる。よごれて蒼い支那人を指さした。二十一歳だつた。額に三ツの瘤があつた。つひさき程、彼に殴られて出来た瘤だつた、紅く血がにんでゐた。

「間のぬけた野郎もあつたもんだね。張宗昌の兵タイにだつて、逃げて捕まるやうな馬鹿はゐねえだ。」中津は嘲笑した。「いつそ、オトシちやどうです。ほかの奴等に、又とない、ええ薬となりませうぞ。」

中津の殺伐な眼は、舌なめすりでも始めさうにかゝやいた。

小山は眼を細めて反対しなかつた。兵士が顔をあけて、今更、珍らしげに中津を見た。

睨み合ひと、石の飛ばしあひをやつてゐた方向で銃聲がした。みな、耳を傾けた。山崎と中津は急いで外に出た。山崎は、最前から軍曹に云ひつけて置いたことを、も一度念を押した。

「は、は。」

軍曹は、暗がりの中で、彼の背にむかつて頭をさけてゐた。

通りで、浮浪漢が、銃聲の方向へ物すきに走せて行く。纏足が、その方向から逃げて来る。又、銃聲がした。まもなく、この小衝突の一方を敷きつぶしてしまふかのやうに、灰色の装甲自動車が、機関銃の角をはやし、地響きを立て、疾馳してきた。犬がうろつく。

「チエツ！ かういふことをやるからいけない！」

山崎は、頭から、自動車の土塵埃にまかれて、親方が弟子の失策を不満がるやうに舌打ちをした。彼は、彼として深い計畫を持つてゐた。彼は、そのために苦心した。利用し得る人間は、誰れでも利用した。中津も利用される株だつた。

「かういふことをやるからいけない。勝たうと思へば、まづ負けろーだ。」
 彼は、中津にむかつて呟いた。

「勝つも負けるもねえぢやないか、そこらの蠟は、大砲を持つてきて、一となめに、なめツちまへばい、ぢやないか！」

「それが……すべて、仕事には、大義名分が立たなげや、勝つても、勝つた方が負けとなるんだよ。」
 「君等のやることはいつも面倒くさいね！」

山崎は、中津の剛膽さ、支那人の間にきく顔の廣さを好いてゐた。それは、利用できる一ツの財産だ。しかし、この一すぢものでないゴロツキは、ほかの空想に夢中になつて、彼の相談に乗らうとしなかつた。それが氣に喰はなかつた。

——顧祝同が、津浦線停車場と、無電局を占領してゐる。それは、甚だ危険なことだつた。それは最もひどく山崎を悩ました。本國や、世界各國に送る報導は、彼の思ふ通りものでなければならぬ。そのためには、多少の捏造があつてもかまはなかつた。その通信機關を顧祝同が握つてゐる。それから、蒋介石は、これ以上、天津、北京にむかつて進軍させる譯には行かなかつた。滿洲を確保する上

から最もいけないことだ。そこで、何か、大義名分が必要となつてくるのだ。云ひがかりと云つてもよい。それを作るのには、中津のやうなゴロツキを手さきに使ふのが一番いゝのだ。

將校が、横の通りからとび出してきた。
 小ぜり合ひは、をさまつてしまつた。二人は、のぞきの看板だけを見物した馬鹿者のやうに、東興棧の方へ歩いた。

「おい、子供のやうな、あんな娘さんへの日参はよして、ちつと、俺れの仕事でも手傳へよ。」山崎は冗談のやうに切り出した。

中津は、道を歩きながら、すゝの、手や、脚や、肩や、鼻、口もとなどの美點を夢中に數えあけるやうになつてゐた。彼は、彼女を誘かいる計畫を空想に描いてたのしんでゐた。その計畫がどんなに滑稽なものであるか。その結果がどうなるか、そんな點は、考へなかつた。彼は、遮二無二、娘を奪ひ出さうと考へてゐた。そして、それを、計畫し、空想するのが愉快だつた。中津は、山崎が、すずのことを云ひだしたついでに、こころよけに、にこ／＼しながら、自分の計畫を打ちあけた。
 「君は、一體いくつだね？」と、山崎はきいた。

「五十三さ。」

別に、中津は不思議がらなかつた。

「あの娘ツ子は、君の子供ぐらゐるの年恰好なんだよ。恐らく、君の三分の一しか年はとつてゐない。」
 「それがいゝんぢやないか。君には、俺れのこの氣持が分らないんだ。あの、軟らかい、子供々々したところが、とてもたまらなくいゝんぢやないか。俺れや、この年になるまで、あんな娘は見たことがない。何と云つていゝか、……俺れの全存在を引きつけるやうな、とても、なんとも云へん氣持なんだ。」

「いゝ年をして、生若い、紺緋の青年のやうなことを云つてら！」

「そんな輕々しい問題ぢやないよ。俺れや、君がどう云つたつて、この決心は、やめられやせん。」

「ふふふッ。」山崎は冷笑した。「ちよつと、可愛いゝ娘ではあるが……、しかし、君なら、あの娘のおツ母あが丁度持つて來いだ。あの婆さんと夫婦なら似合つてら。どうだい、あの親爺はへ口中で領事館に叩ッこまれとるし、婆さんをひとつものにしちやどうだい？ それなら、俺も手を貸してやるよ。」
 「冗談はよせやい。——あんな腐れ婆にや、あきくくしてゐら。何と云つたつて、俺れや、處女でな

けや駄目なんだ！ 處女の味は、又、特別なもんだ！ 二度とあんな娘は手に入れやしなない！」

小山は支那家屋の兵士たちに、糞喰へーのやうな顔をして、そこを立ち去つた。捕まへられた工人は彼のあとにつゝいた。

二十五

竹三郎は、領事館警察の留置場から、S病院に出た。

彼は、瀬戸引きの洗面器の縁で、自分の足の小趾をぶち切つた。

それで留置場から出ることが出來た。内地から來たての、若い外務省巡查が、しげこんだやうな顔をして、彼を監視して病院へついで來た。

マツチ工場で、蔣介石の抗議による守備區域の障害物の撤退、南軍と、日本軍との衝突の危険、などについて、軍隊自身よりも、支配人が氣をもんだ。社員は、朝からそはそはした。

工人が、北伐兵の過激派と策應しないとも限らない。十時頃、幹太郎は、親爺が、S病院に出たこ

とを知らされた。

お母と、だぶくと詰襟の支那人が、咎めたてる巡警をつきのけて、いきなり事務室へとびこんで来た。彼は吃驚した。

お母は、息を切らし、蟲がつめた子供のやうな眼をして、どういつていいかわからないものゝやうに、何も喋れなかつた。幹太郎はそれを見たゞけで、直ぐ、すゞがかつばらはれたのでないかと不安にされた。

「早よ、S病院、去、あなたのお父ッあん、負傷あります。日本太夫、診て、出血あります。クワイクワイデ。」

詰襟の善人らしい支那人は、日本語と、支那語を、ごちやごちやに使つた。早く、幹太郎に用談を傳へようとあせる。距離のある眉と眉の間に、皺をよせた。あせると、あせるほど、日本語は舌の先でもつれてしまつた。業を衰して、たうとう、支那語ばかりで叫んだ。分つた。

幹太郎は、輕蔑の眼を、小山とかはして冷笑してゐる支配人に、むツとするものを抑へて、一言、ことはつた。そして、すぐ、病院の方へどび出した。兵士たちが、街上に撤退する拒馬を重さうにひ

きづつてゐた。

「一寸、待ちなさい。」母があとから呼んだ。

「……。」

幹太郎は、母だと知りつゝ、わざと返事をしなかつた。

「一寸、待ちなさい！」母は繰りかへした。

「何ですか？」彼は怒つたやうな聲を出した。

「これを持つて行かなげや駄目なんだよ。」蟲がつめた子供のやうな母は、門鑑の巡警の前に立つてゐた。「これがなげれや駄目なんだよ。」

帯の間から、少さい、紙の小匣を取り出した。「快上快」だ。

「家は大丈夫ですか？」

幹太郎は、云ひ度くないと思ひながら、やはり中津が氣にかゝつて口に出してしまつた。母は、何をきかれたのか解しかねて黙つてゐた。

「家は、すゞと俊で大丈夫ですか？」

「あゝ」と母は無心に云つた。「今、さつき、出しなに、長さんが、すれちがひにやつて来た。大丈夫だよ。」

「中津がやつて来た！——何をやり出されるか分らんぢやないですか！」

「……」

「あなたは、こゝからお歸んなさい。」幹太郎は小さい行きかゝりの感情にこたはつてゐられないと思つた。きつぱり云つた。

「お父さんは、どうなんだらう。」母は躊躇した。

「すゝと俊では、どんなことをせられるか油断がならんぢやありませんか。」

「でも……」

やはり、夫が氣にかゝらしかつた。どうなとなれ！これ以上強ひることは出来なかつた。母は病院へ急ぐ彼のあとから、詰襟の支那人と二人でついてきた。

彼は、中津のあぶない陰謀に、うすうす感づいてゐた。母と喧嘩をしながら、それでも婉曲に、家を留守にしないやうに繰りかへしてゐた。母とすれちがひに中津が家へやつて行つた。——それは、

彼には、中津が、卑猥な會心の笑みをもらしてゐる有さまさへ想像せられた。そして、不安はますます強くされるのだつた。

竹三郎は、領事館の留置場で、ヘロインがきれてしまつた肉體を、我慢が出来ただけ我慢をした。

しかし、どうしても、二十九日の拘留期間を我慢し通すことは出来なかつた。彼は、監視の若い巡査の輕蔑と、冷笑をあびながら、唸き死ぬばかりに、ばたばたと肉體的にもだえ苦しんだ。

昔、村會議員になつた。ほかの收賄をやつた連中を摘發してやらうとした。そんな時代の颯爽とした面かけは、全く失はれてしまつた。外科病室の白い、ベットで、看護婦達に押へつけられながら、あばれてゐる黄色ツほい、死にかけた黄疸患者のやうな、親爺を見つけて、幹太郎は、まづ、それを思つた。誰れが、かういふことにしてしまつたか！俺達は、誰からも保護をうけてはゐないのだ！

日本人の特典は、貧乏な者には、通用しない特典だ！

若い、男まへの、支那人の醫者が、骨ばかりの右の足のさきに、繃帯を巻いてゐた。巻かれながら親爺はうめいた。

醫者は、一見、日本人のやうな感じがした。親爺のちぎれた趾からは、紅い血が、ガーゼで拭かれ

たあとへ、スツスツと涌きあがつた。白い繻帯は、巻くそばから紅く染つた。

監守の支那人が、いまいませいな顔をしてそばに立つてゐた。幹太郎が這入つて行くと、領事館からついてきた、帽子にエビ茶の鉢巻のついた若い巡査は、一人が、ちよつと顔を見合して室外に出た。

幹太郎が、「快上快」を親爺に與へるために持つてきた。それで巡査は氣をきかして場をはづした。

—そのことは、幹太郎の方へも、すぐ感じられた。

親爺は餓死した屍のやうに、くわん骨はとび上り、眼窩は奥の方へ窪んで、喘ぎく呻いてゐた。

「いつそ、この際、再び魔酔薬を與へぬやうに我慢させて、悪い習慣を打ちきる方がいゝんだ！」と息子は思つた。

親爺は病的に落ち窪んだ眼で、息子を認めると、扉の外の巡査に聞えるのもかまはず、むづかる子供に「快上快」を求めた。

「チエツ！ 仕方がないなア！」

薬は與へられた。

竹三郎は、如何にも、うまさうに、むさほり吸つた。たてつけに、一と匣分の癡酔薬を吸つてし

まつた。

「苦るしうて、苦るしうて、やりきれんからたうとうこんな藝當をやつちまつた。洗面器で足の小指をぶち切つた。——それでもしなけれや、留置場からは出られねえんだ。俺れがどんなにのた打ちまわつとつたつて、領事館の奴はへへら笑つてゐるやがるんだ。」

母と、詰襟の支那人がやつてきた。薬がまわつた竹三郎は、足の疼痛を忘れた。自分を取りかこんだ者達にはしやぎ、唇には、足らん男のやうな微笑さへ浮んだ。

「全く、ヘロインの虜になつちまつたんだ！」と幹太郎は思つた。「自分の指を切り落してもヘロインが吸ひたいんだ！ 指とヘロインの交換！ 支那へさへ來てゐなければ、そんなことになれやしなかつたんだ！ あの村から追ひ出されさへしなければ、こんなことになりはしなかつたんだ！」

彼は恐ろしい氣がした。

「もうないか。……もつとねえか、吸はせろい！ 吸はせろい！」

親爺は、また、子供のやうにせびりだした。

支那には、この竹三郎のやうに、外國人の手によつて持ちこまれる阿片や、モルヒネや、ヘロイン

の捕虜となつてゐる人間がどれだけあるかしれないのだ！ 阿片のために、どれだけ人間が、犠牲となり滅されつゝあるか知れないのだ。……

二十六

額の禿け上つた、見すほらしい跛が、炎熱と塵埃にむれてゐる石疊の小路へ這入つた。

ヒョク／＼して、外見は、いけつない歩き方をしてゐた。が、身軽るくさつさと歩いた。

暫らくすると、それが、這入つた石疊の小路から引つかへしてきた。以前より、もつと身軽るく、片チンバの脚で飛ぶやうだつた。やがて、洋車を呼ぶと、一足とびにとび乗つた。

「早くやれッ！」

洋車は、塵埃と炎熱の巷へ吸ひこまれて行つた。

小路の奥の、石堀の中の一ツの家では、さすが、安物の手ミシンにむかつて、ドレスを縫つたり、ほぐしたり、又縫つたりやつてゐた。眞直に、平行に行かない縫目が彼女に氣に入らないのだ。

天むきの鼻の一郎は、顔ぢゆうが眼ばかりのやうに見える。眼が大きく光つてゐた。去んだトシ子

そつくりだ。彼は、俊のそばに這ひよつた。俊がよんでゐるピラを小さい手で荒ッほく引つたくらうとした。

ピラは、蒋介石の出したピラだ。学校の、漢文讀本の漢本とも、またいくらかちがふ。俊はなかなかそれが讀めなかつた。

「ま、待つてなさいよ。」

手で掴み取りに来る一郎を彼女は追ひやつた。玩具の犬をやる。

——國民政府は、この地方に限り、租税を全額免除する。……

一郎は、犬をはうつた。そして、また手を擴げて掴みかゝつてくる。ピラは皺くちやになる。俊はそれをのばして、またよんだ。

——張作霖、張宗昌、強盜、強姦、賣國的……

ふと、一郎は、両手で彼女の手からピラを叩き落してしまつた。紙はすたく／＼になつた。まだ、よみさしである。

俊は、それが惜しいとは思はなかつた。彼女は、何か考へてゐた。すゝは、一心に、ミシンに注意

を集中してゐる。針が急速に、規則的に上下する。縫目がジャリ／＼と送られて行く。

「ちよつと、あの人、今日、何だか變にをかしかつたわよ。」

「なアに！」

すゞは空虚な返事だつた。

「なにか、たくらみがありさうだつたわよ。あの怒つたやうな眼で、じろ／＼家の中や、私達を見て行つただけぢやないわ。眼と、口もとの笑ひ方に、恐ろしい何かがあつたわよ。」

「さうかしら。」

猫のやうな俊は、先日からの中津の行動をいろ／＼に思ひ起してゐた。恐ろしい何かの兆候が、二三日も四五日も前からあつた。

【「ちよつと！ ちよつと！……」

俊はまた姉をよんだ。……

支那宿の東興棧の二室には、張宗昌の退却後、變装をして市街にとまつてゐる中津の仲間が集つてゐた。四五人だ。荒つほい、無茶な仕事が飯より好きな連中だつた。せもの低いすんぐりした唐は、素手で敵の歩哨に掴みかゝつて、のど笛を喰ひ切り、銃と劍を奪つてくるやうな男だつた。金持ちの娘や、細君を、人質にかつばらつた經驗は、みんなが三回や、五回は持つてゐた。

床篋子、桌子、机子、花模様茶壺、旅行鞆、銀貨の山。

中津は、何回となく空想で練り直した掠奪の計畫を、實行する段になつて、なほ、心は迷つてゐた。いつそ、根本からよしてやらうか。孫娘を可愛がるやうに、可愛がるのはいゝことだ。その方がいゝかもしれん。こんな迷ふことは、嘗てなかつた。が、仲間には、それは、おくびにも出さなかつた。ともかく實行方法を話した。仲間を三臺の自動車に分けて乗らす、日本軍の守備區域を走る時には、山崎に云つて、誰何されない交渉をした。和服の娘を無理やり積みこんでゐるのを歩哨に目つけられると面倒だからだ。南軍の駐屯してゐる區域にさしかゝると、兼て手に入れておいた、青天白日旗を自動車に立てる。さういふことにした。

二臺の自動車は、街を流してゐる。中津は娘を、おびき出してそこへ、歩いて通りかゝる。さきの

一臺が、急停車をする。刹那に、踊り出た仲間は娘を車中へさらひこむ。中津は、うしろの車に乗つてあとにつゞく。かういふ風にきめられた。妹も、子供もついてくれば、三人共、さらつて行く。そして、こゝから約四哩の黄河の沿岸の濼口まで、一息にとぼして、そこから天津方面へ落ちのびるのだ。かういふ計劃だつた。若し、すが、中津のさそひに乗らなければ、五人が屋内に押し入つて行くつもりだつた。暴力で拉致するよりほかはなかつた。金は銀が五百元あつた。それから通らない、紙幣が三千五百元あつた。

中津は、なほ千圓ほど工面をしなければならなかつた。

同宿の山崎は、頻りに、この暴舉を思ひ止まらせようとするのだつた。けちくさい男だ。中津にはそれが、金を貸すのが嫌ひだからとめてゐると取れた。それは急所を突いてゐた。そして、彼はとめられればとめられる程、意故地になつた。

「よさないか、おい、そんなことは……」と、山崎は云つた。「綁票にかつばらふんなら、まだ分るが、一文もない軟派の娘をかつばらつてどうするんだい。ええ、冗談ぢやないぜ。」

「黙つてる玉へ！」中津は、時刻が迫れば迫る程、動搖をかくして、糞落ちつきに落ちついてゐるこ

とを示さうとした。

「君が、芯からそんなに熱心なら、なにも、かつばらはなくたつて、結婚を申し込めばいいぢやないか。野蠻な暴力的なことをやらなくたつて、正式に娘を買へばいいぢやないか。それなら俺れだつて賛成だ。」

「馬鹿云ひ玉へ！」と中津は笑つた。「張大人だつて、北京の東安市場へ行く途中で、ちよつと見た別品を早速、自動車へかつばらつて、タイタイとしやつたぢやないか、俺等にや結婚申込なんて、お上品なやり口は、性に合はねえんだ。ほしいものは、どんどん遠慮なしにかつばらつて行く方が、はるかに、面倒くさくなくつて愉快ぢやないか。」

中津の仲間の赫富貴は、濁つた眼を細めながら、賛成するやうに頷いた。

「やつばし、君等は、馬賊の習慣から、ぬけきれねえんだ。」
中津は笑つた。

「そんなこといふのは、理窟ッほいあの娘の兄と君だけくらゐなもんだよ。この廣い支那ぢゆうで。」
「いいや、俺れや眞面目に云つてるんだ。君のために。」

「真面目もへつたくれも有ったもんかい！……氣に入れや、かつばらつて鼻にするし、いやになれや
 ボイボー賣ッとはすんだ。世話がなくなつて、どれだけ氣しよくがいか知れめえ！」

「あんまり増長するなつてよ！ 俺れや歩哨線の通過なんか知らねえぞ。」

「ふふふ。——知らなげや、知らなくつてもいゝさ。その代り俺れの方もバラシてやるから、——ネ
 タはいくらでも豊富に擱んでんだぞ。」

これはおどかしだつた。

集まつた五人は、出發前の酒杯をとつた。五人に較べると、山崎は、まだ、どこともなく日本人く
 さい感じが残つてゐた。さかづきをすゝめてもブリツとしてのまなかつた。その身肌につけてゐる五
 挺の、全部彈藥をこめたピストルは、大掛兒の上から、胸に二挺、兩脇に二挺、右の腰のポケットに
 一挺と、一寸した服の凸凹によつて見破られた。——このケチン坊、なかなか金を溜めこんでけつ
 つて、人には貸さうとしやがらねえんだ！ 中津は、忌々しげに考へた。畜生！ こいつは、支那へ
 奔放自由な生活をたのしみにやつて來てゐるのぢやないんだ。小金をために來てやがるんだ！ チエ
 ツ！ くそツ！

自動車がやつてきた。

も一度、中津は正式に嫁に貰つて、孫のやうに可愛がつてやつたら！ と思つた。

その方が平和で、その方がよかつた。が、もう一步を河に踏みこんでゐた。どうせ、激流でも渡つ
 てしまはなければなるまい！

「さア、出かけるでしょうか。」彼は立ちあがつた。金が、たりないことにも、氣がかゝつた。

「ボーイ、毛布はどうしたんだ？」眼を細めて賛成した赫富貴が云つた。「あのロシヤ毛布を前の車に
 積んどけ。赫は又、快よけに眼を細めた。——街なかを通る時にや、女をすつほり頭からくるんど
 かないと、今日びの物々しい戒嚴では、一寸、仕事がむづかしいからな。あのカーキ服の歩哨に猿轡
 をはめた女が見つかつた日にや最後だよ。」

五人の者は、身支度を整へて、廊下へ出た。二階の窓硝子から通行人のポケットへ手を突つこんで
 る青鼠服が見えた。ボーイは毛布をもつてきた。

「それぢやないよ。ロシヤ毛布ぢやないか。」

赫は大聲で呶鳴つた。

中津の金のバラ撒き方は荒かつた。向ふにゐた別の、少女のやうな美しいボーイが、赤茶色のロシヤ毛布を手にして馳せ出してきた。

「うむ、これこれ。」赫は階段のところをそれを受取つた。手のこんだ、厚い、いくらか、はしツかいやうな毛布だ。赫は、ちよつと、両手をひねらした。と思ふと、一瞬に、スッポリと美しいボーイを頭から毛布にくるんでしまつた。

「嗚呀ー」ボーイは不意打ちを喰つて、びつくりした。

「どうだい、かうやるんだ。」自分の手に入つたやり方を誇らしげに、赫は、ほかの者達を見まわした。「かうやればもうしめたもんだ。」

中津は満足げに笑つてゐた。

山崎は、この五人のゴロツキどもを、なほ、未練けになにか釣銭でも取つてやりたいやうに見送つてゐた。

自動車は、太馬路から、拒馬や、鐵條網が、頑張つてゐない、緯四路へ出て、七馬路で永綏門の方面に曲り、日本軍の警備區域でもなく、南軍が散在してゐる區域でもない、その中間の線を選んで迂

廻した。中津は、洋車で十王殿へ乗りつけた。

おびき出した娘をかつさらツちもふのは、館驛街に於てやる。打合せが済まされてゐた。

中津は、洋車からおりた。一間時ばかり前に、飛ぶやうに這入つて飛ぶやうに出てきた石疊の小路を、又とぶやうに歩いて行つた。アカシヤの青葉が風にさらさらと鳴つてゐた。その下を、彼は進んだ。

跛をひきながら、しかも、青年のやうに元氣な足どり。足が地につかぬものゝやうだつた。

門はしまつてゐた。

中津は、王錦華を呼んだ。内部に人の氣配がする。それなのに返事がなかつた。又、彼は呼んだ。數言の強迫的な文句の後、かんぬきが、ガチツとはづされた。中に支那人のボーイがおつおつと立つてゐた。

「どうしたんだ！」

「はい。……いらつしやいませ。」

「どうしたんだ？」

屋内には、つひさき程まで、ミシンをかけてゐたすが、縫ひさしのドレスをそのままに見えなかつた。俊も、一郎もゐなかつた。

「どうしたんだ？」

中津は勝手を知つてゐる部屋々々を急速に一巡した。身體だけで、何物も持たずに逃げ出したあとがあつた。——「感づきやがつたな！ どつかへ、かくれたな。逃げ出しやがつた！」

暫らくうろくしてゐた。自動車で待ちかねてゐた連中がどやどやと押しよせてきた。

掠奪や亂暴がすきな連中だつた。

佛壇をはねかへした。抽出しをぬいた。中の快上快と、銅子兒が、がらくたのやうに床の上になだれ落ちた。

體裁よく飾りつけられた屋内のさまざまなもの、片ッぱしからめちやめちやに放り出された。めほしいものは、五人の手が、それを掴み取ると、慌て、ポケットへねぢこんだ。

娘の掠奪がいつのまにか、家財の掠奪にかはつてゐた。それも彼等には、非常に面白かつた。

二二七

幹太郎と、お母は、病院から家へ歸らうとした。洋車に乗つた。

何處からともなく、小銃の音が五六發聞えた。

火花だと思つた。

街を、標悍な蒙古騎兵の一隊が南へ、砂煙を立てながら、風のやうに飛んで行く。

カーキ服の兵士達は、着剣した銃をさけ、ばらばらとそのあとへ現はれた。豆をはぜらすやうな、

小銃の發射は、方々ではけしくなつた。諱六路へさしかゝると、俣夫は、おちけづいて、しりごみした。

「早くやれッ！ 家へ歸つてみなけやならんのだ！」

諱五路まできた。壁が厚い洋館の二階から發射される彈丸が、ヒウヒウと、街路の上をとり交ふた。

兵士が走る。はだして、シャツの前をはだけた日本人が走る。紅い繻子の、前髪の女が、ころけさうに走る。

そこから、諱三路まで、突つきつて行く。その間が、幹太郎自身も、危険だと感じずにはいられなくなつた。

「早くやらんか！ なに、マゴ／＼してゐるんだ！」

「旦那、いけましねえ。いのちあぶない。」

「かまはん！ やれ、やれッ！」

しかし、苦力は、どうしても進まなくなつた。

これは、彼の家の掠奪に引きつゞいて急激に起つたことだつた。將に崩れようとする家は、一本のいさびをはづしても、巨大な屋臺骨が、一度に、バラ／＼に崩解してしまふものだ。喧嘩買ひには、袖がちよつと觸れるだけで十分だ。それが、結構云ひがかりとなる。

中津の略奪が市街戦のキツかけとなつた。中津の亂暴を見て、附近にうよく／＼してゐる青鼠服が押しよせて來た。家は叩き毀された。それをきいたカーキ服が馳せつけた。射撃あひはすぐ始まつた。そして、瞬／＼ひまに全市にひろがつてしまつた。まるで、用意をして、待ちもうけてゐたものゝやうに。

猛烈な、有名な市街戦が、これから引き起されて行つた。

K S 倶楽部の士間は、命からがら、身をもつて逃がれて來た人々で埋まつてゐた。

避難者は、そのあとから、まだ、まだ押しよせて來た。

青鼠色の南兵に、出口をふさがれ、壁を破つて隣家へ逃げ、支那服を借りて、通りかゝつて洋車のあと押しをして、苦力に化けてのがれてきた者があつた。妻が南兵に拉し去られるのを目撃しつゝ、自分だけ、のがれてきた男があつた。毛布、風呂敷包をかゝえて來る者。サル又と襦袢だけの者。父親の脊に脊負はれて、身體の具合が悪いやうな泣聲で泣く眼が赤い小さい子供。

「まあ、百々ちやんはえらいんですよ。私がつれて避難して來る時に、若し、南軍に擱まつたら、どうするかつてきくとね、おツ母さんと一緒に剃刀でのどをかき切つて死ぬるッて云ふんですよ。」腹にボテのある呉服屋のお上は、一人だけ得意げに高高く喋つてゐた。「本當にえらいでせう。これこそ日本男兒ですわね。」

彼女は、十歳ばかりの鼻の平たい子供を高く抱き上げて人々に示した。

「まあ、これこそ、本當に日本男児ですわね。」

知つてゐる人間の顔を見ると、この太つちよの牝鶏は、相手の心配をかまはず、誇らしげに、これを繰りかへした。

すと、俊とは、この土間の片隅に、人々に押されて、小さくなつて蹲つてゐた。一郎を南軍に取られてしまつた！ 彼女たちは、父親の背でむづかる眼の赤い子供を見て、始めてそれを思ひ出した。どこで失つてしまつたか？ はつきりした記憶がなかつた。

ひつかへして探しに行くのは、命がけだつた、彼女は、自分の身を守るだけに力いづばいだつた。

——また、おほぜいの女達が足袋はだしで、どやくくと飛びこんできた。詠仙里の娼婦だつた。支那兵が女郎屋街に這入りこんだ。娼婦はすつかりあわて、しまつてゐた。

裂けたワイシャツに、ズボンだけの男は、アンペラに腰をおろすことも出来ず、彈丸よけに毛布を垂らした窓の傍に突つ立つて、唇をかみしめ、ポケットに、片手を突っこみ、光つた眼で前方を見つめてゐた。ちつとしてゐられない憔悴が、その身體全體に現れてゐた。妻と子供を見失つてしまつた

人だつた。

「まあ、小出さん！ おききなさい。うちの百々ちゃんはね……」

また、牝鶏がうるさく繰りかへしだした。

すゞは、中津らが彼女の家へ押し入つてきた時、俊と一郎と三人で隣の馬貫之の棕櫚を張つた床篋子の下で小さくなつてゐた。それを覚えてゐる。たしかに三人だつた。寢臺にも、寢具にも、その附近すべてに、支那人の變な臭ひがしみこんでゐた。

家の方では、大勢の荒々しい足音と、罵る叫聲と、破壊の騒音が渦を巻いてゐた。板をはぎ取るめりめりボキン。戸棚が倒れる轟音。硝子が割れる音、壁がどさる音。

恐る、恐る、彼女は床篋子の下から這ひ出て窓に近づいた。そして、眼だけを出して外をのぞいた。

石疊の、無氣味な小路に、紺鼠服の兵士が、いつばいうごめいてゐた。

彼女の手にシンを小脇にかゝへて、向ひ側の小路へ消えて行くよこれた男があつた。針金の鳥籠が

踏みへしやがれてゐた。

よく隣の馬貫之の細君にかくして貰つたものだ。

誰れか、外から門を叩く音がした。殺しに來た氣がした。

荒々しい足音が近づいた。彼女達は呼吸をとめて耳を澄ました。

馬貫之だ。

「あなたがた、ここにゐては危いです。早く便所にかくれなさい。」——馬貫之は親切だつた。便所へ逃げた。

そこも、見つかり易かつた。困つた。もひとつ隣の支那人の家が、この便所にくつ附かうとする、そこに間隙があつた。俊は、無中に六尺の塀をよぢのほつた。そして、その間にとびおりのた。そこはよかつた。すゝもあとからつゝいてとびおりのた。

五六人の足音が、塀の向側でどやどやと椅子や箱を蹴散らしてゐる。

便所にも來る様子がした。塀がドシンと蹴られた。耳をすました。話聲は支那語だ。中津だらうか南兵だらうか？ どつちにしろ見つかれば殺されるか、裸體に引きむかれるかだ。

家と家の間隙は、反対側の小路に通じて開いてゐた。慌て、白足袋跳足で、逃けて行く人かけが細い間からちらつと見えた。着剣のカーキ服が馳せて來る。何も考へるひまはなかつた。その小路へとび出した。

そして、人が走つて行く方へ一目さんに走つてしまつた。前にのろくと行く者は、押しつけて走つた。一郎はどうなつたか忘れてしまつてゐた。

KS 倶楽部へは、あとから、あとからといくらでも避難者が押しよせて來た。いつのまにかういふ大動亂になつてしまつたか？ 彼女達は不思議に思つた。彼女の家が市街戦のきつかけとなつた。それは知らなかつた。悪いのは南兵だ。さう思はせられた。多くの人々も、勿論、さう思つてゐた。いつでも事件のきつかけは中津のやうな反動のゴロツキが必要に應じて作つてゐるのだ。さういふことは勿論知らなかつた。

遠いところや、或は近くで、大砲や銃聲が断れなく、又、つゝいて響いてゐた。大砲が發射されるごとに、硝子窓は、ビリビリと震動した。頭をめちやくと斬られた人が這入つてきた。何時間か過ぎた。

男の者が外に出て米をといだ。

飯が出来ると、その男たちは、自分の知つてゐる者や、女郎ばかりに飯を配つて、向うの方の人々は、腹いっぱい食べてゐた。が、知り合ひでない者には一杯もあたらなかつた。すゝと俊とは自分達のけ者にされてしまつたやうな淋しい感情に満された。兄がゐれば、飯を食べさせて貰へるだらう。ふとすゝは、そんなことを思つた。紅い着物の娼婦達は、もう澤山といふのに、なほも一ツづゝの握り飯を強ひられてゐた。

やうやう、向ふの人々の食つた残りの飯が、櫃の底にちよつびりまわつて来た。一段下の別扱ひをされたやうな腹立たしさがした。しかし、それを食ひ逃がしたら、又、いつ飯を食べられるかわからない。

みんな、我れさきに、その飯をよごれた手に掴んで取りがちをした。それは悲惨ながきのやうな有様だつた。

夕方、人々は、S銀行の宿舍へ、移れといふ命令をうけた。ここでは防ぎきれないからだ。と云ふ。すゝは、俊の手を、しつかりと手を握りしめた。弾丸があたらないやうに壁に添ふて大通りへ出た。

いつもはにぎやかな大通りが、がらんとして、犬の子一匹も通つてゐなかつた。時々、銃聲がぼつぼつとときこえた。

「あれ見なさい！ あれ……南軍め、澤山やられとる。」

子供をおぶつて、走せて行く、鬚の男が、走せながら、郵便管理局の構内を指した。

「何だらう？」

すゝはちらつと、指さされた方へ顔を向けた。

鐵條網を引つばつた柵の中に、武装解除をされた紺鼠の中山服の兵士達が、両手を後に縛られて、獸のやうに、呻いたり、わめいたりしてゐた。何十人ゐるか？ 何百人ゐるか、數がわからない。着飾した銃を持つて、四五人のカーキ色の兵士が、ばらばらと立つてゐた。

ふと、俊が、何か叫ぶと、彼女の手を重く引いて、地上にがくつとへたばつた。

「どうしたの？」

俊は、流弾に脚をうたれてゐた。白ツほいメリンスに血がにじんでゐた。

「どうしたの？」

傷の痛さよりも、彈丸にあたつた意識が、すつかり、張りつめた氣持を奪つてしまつた。俊は、どうしても立ちあがれなかつた。ほかの者は、どん／＼彼女達を抜いて走つた。

すゞは、妹に、自分の肩へすがらして、背負つて立上つた。二人だけが一番最後に取り残されてゐた。たび／＼重い妹をすり上げた。つめたい血が、せわしくかはす、ふくらはぎに、ばた／＼流れかかつた。

……人々は、S銀行の舎内のゴザの上で、一夜を過した。二枚のゴザの上に、十三家族が坐るのだ。醫者はなかつた。すゞは、ハンカチを裂いて、うたれた紫色の俊の太股をしばつた。

二人には、ゴザの端もあたらなかつた。板の上に坐つた。

「そこでは痛いせう。これに坐んなさい。」

お齒ぐろをつけた小さいおばさんが、自分のねまきをござの代りにひろけた。

すゞは、そのおばさんの顔を知らなかつた。しかし、その上で血で、ねまきを汚さないやうに氣をつけながら俊に脚をのばさした。

二人は、並んで、おばさんの、ねまきの上に寝た。

「あゝ、恐ろしいこつた。今日中にどれだけの人間が殺したり、殺されたりしたか、數が知れまい。」と、おばさんは吐息をして、なむあみだぶを唱へた。「……すつかり財産を失つた人がどれだけあるか知れまい……百ではきくまい。家を壊されてしまつた人だつて、どれだけあるか……あ、あ、怖いこつた！ 怖いこつた！」

なむあみだぶ。

なむあみだぶ。

夜はふけた。俊は、齒を喰ひしばつて疼痛を泳へようとしたが、唸きが、ひとりでに、その齒の間から漏れた。

大砲は、なほ遠くで、静けさを破つて轟いてゐた。人の駢聲や、犬が吠えるのがきこえる。電燈だけが、ますます明るくなつてゐた。憲兵の靴が、廊下にコットン／＼とひびいた。

翌日、お晝すぎ、二人は、脚を怪我した父と母がゐる病院へつれて行かれた。

そこで、俊は手あてを受けた。

軍隊と戦争には、殺戮と掠奪はつきものである。

戦争が起れば、必ず、掠奪が行はれ、徴發が行はれ、殺人が行はれる。

これが、利害に應じて、誇大に報道される。又、利害に應じて、反對に、黙殺され終る。

この日の、虐殺された邦人は、二日後に土の中から発見した九人をも合はして十四名だった。

内地のブル新聞には、それが、二百八十名と報道された。

新聞は、婦人を裸體にして言ふに忍びざる慘酷な嘲り方の後、虐殺した、と書いた。娘は極所に棒

を突きこまれ、腕の骨を棍棒で叩き折られ、兩眼をくりぬかれた。と書いた。

特派員の眼前には頭蓋骨を叩き割られた死體の腦味噌が塵の路上にこぼれてゐると知らせた。

掠奪についても、同様な報道がせられた。

貴重品や被服は勿論、床板、疊、天井板をひつpegし、小學生の教科書をまでかつばらつた。そし

て、金鎖、金時計、大洋二百四十元、紙幣三百八十元を強奪された。その遭難者の談が載せられた。

それを讀んで、南軍を憎まない人間は、どうかしてゐる。暴兵を全滅せしめるのが當然だと憤らない人間はどうかしてゐる。

それほど誇大な報道の力は強かつた。

國民の輿論、敵がい心、兵士達の向ふ見すの勇氣、憤激などは、かういふ報道から不可避的に作り

出されて行くのだつた。

山崎は、これを理解してゐた。そして、利用した。

三日目に、彼は、津浦線ガードの東北の畑地で、新しく盛られた土饅頭の下から、埋められた慘

殺體を発見した。

新しい鐵のあとが明らか土饅頭は、何となくあやしげだつた。

掘りかへした。

一人の女と、二人の男がなまなましい、酸っぱい臭ひを放ちながら横たはつてゐた。更に、そこから僅かばかり隔つた亞細亞坦克の附近にも六名の死體がかくされてあつた。左右の耳が斬りそがれ、ある者の腹は石をつめこまれてふくらんでかたくなつてゐた。

十王殿も、館驛街も、多くの家が掠奪と破壊のために、ごたごたにひつくりかへされて見るかけもなくなつてゐた。

支那服の山崎は、そこを見てまわつた。——これを知らしてやらなければならぬ。と、彼は考へた。兵士たちにも、邦人にも、内地へも。

職業的な感覚から、彼は、これを知らせば何が起るか、それはよくわかつた。十名内外を二百八十名と言ひふらす偉大な効果を、この男はよく知つてゐた。戦争は、國民を興奮と熱狂の状態に誘導しなければやり得るものではない。敵を極悪に宣傳しなければならぬ、第三者の同情を引かなければならない！ 彼はこれをよく知つてゐた。……

彼の友達の中津が、まっさきに、侵入して掠奪した家は、十五殿に、バラバラの空骸となつて残つてゐた。これがきつかけとなつたのは、彼にとつて、もつちの幸ひだつた。乞食がそこへ這入つてゐた。第一回の掠奪の後、放りさがされて散らばつてゐる、壊れ椅子や、アンペラや、柄が折れた娘の洋傘を盗み出してゐた。

「さうだ、これが猪川の家だつけ。」と彼は思ひ出した。

「ここを南軍の奴等が掠奪したのが、戦争のもとになつたんだ！ さうだ、非は南軍にあるんだ！」

この得手勝手な男はその前に立ち止つた。壊れた厚い壁のかけで、乞食はこそそやつてゐた。

「おい、山崎さん！」

耳に不快な記憶のある聲が背後でした。

「あゝ、陳先生！」

ドキリとしたものを、山崎は取りつくろつた。

S 大學へ學生に化けてしのびこんだ。それ以來、酬いを約束しながら、幾度かはぐらかして一元も渡さずにゐる陳長財だつた。

「どうです。景氣はどうです？」

——陳は複雑な笑ひ方で山崎を見た。

「あゝ、そいつか、——そいつは、また今度だよ、このどさくさに、そこどころぢやねえんだ。」

「また今度？ また今度？」陳は繰りかへした。「……何回でもそんなことが云へた義理ぢやあるめえ！」一步を山崎に詰めよつた。誰の力で、アメリカの秘密を具體的に掴むことが出来たんだ！ 誰

の力で貴様が手柄を立てたんだ！ その眼はさう云つてゐるやうだつた。

「厄介な奴がついて来やがつた！」と、山崎は考へた。「いつそのこと、この、どさくさまぎれに、片つけつちまはうか。」

彼は、歩き出した。

陳はあとからついて来た。

どこまでも、尾行のやうに、あとについてきた。館驛街に出た。緯一路へ曲る角にきた。山崎の右の手は、前後左右に眼をやつたかと思ふと、大掛兒のポケットに行つた。

次の瞬間、豆がはちけるやうな、ピストルの響きが巷に起つた。殆んど同時に、陳長財の手元にもニツケル鍍金のものがピカツと光つた。

しかし、陳は、引鐵を引くひまがなかつた。ピストルを持つた手を壊れた屋根の方へさしあけビリッとして胸懐ひをして、がらくたものが散らばつてゐる街上に重くドシンと倒れた。

「くたばりやがつた！」

山崎は歩いた。このピストル一發で、陳に渡す三百元が、自分の懐へころけこんだのだ。それを思

ふとぞくぞくした。

彼は、邦人の家が掠奪された有様や、兩耳を斬られた女の屍體、腹に石を詰められた男の屍體、それを、兵士達や、避難民や、内地の大家に知らしてやる必要があつた。そのことを考へた。世界中に知らしてやる必要がある！……

司令部の前に来た。

「止めッ！」

歩哨の聲は彼の耳に入らなかつた。

「止めッ！」

やはり彼は、何事か考へながら歩いてゐた。

そこは、北軍退却の以前から嚴重な服装検査と警戒のあるところだつた。孫傳芳の自動車もそこで停止を命じられたりした。

自動車の主は引きずりおろされた。ポケットはさぐられた。

「俺れは、孫傳芳だぞ！」

武装せる市街

金モールの額のはけ上つたおやぢは、じだんだを踏んで口惜しがつた。

「俺れは、孫傳芳だぞー 無禮者め！」

けれども、歩哨には、直魯聯合軍司令もヘッタクレもあつたもんぢやなかつた。すべてが同じだつた。任務をはたすだけだ。

「チエツ！ 孫傳芳ツて何だい！ ごつけな、いい金モール服を着てやがつて、どこの馬の骨だい！」

山崎が通りかゝつたのはこの歩哨線である。歩哨は、支那服の、支那人くさい男を咎めた。

「止めッ！」

山崎は、自分の支那服を忘れて、すっかり日本人のいい氣持になつてゐた。慘酷な情報で、群衆の熱情をあほり立てる、その沸騰する有様を、夢中に想像してゐた。話してやる！ 知らしてやる！ ……そして、誰何されるのは、ほかの支那人だと感じた。そんなつもりだつた。

「止めッ！」

まだ、彼は氣がつかかなかつた。

つゞいて銃聲がした。

五挺のピストルと、八千圓の預金通帳を肌身につけて離さなかつた山崎は、ぼたりひつくりかへつた。

くたばつちやつた。たうとう！

二十九

飛行機がとんできた。

市街の上空にさしかゝると、それは、糞をする鳥のやうに、續けさまに黒いかたまりを落した。スーッと空中に線を引きいてボーンと地響きがする。投下爆弾！

三機である。くの字形に距離を置いてとんでくる。古巢のやうな、この街の上空に大きな圓を描いて翔けめぐつた。西端の上に来た。その中の一ツは、ボツと硝子だまのやうにはぢけた。すると、すぐ、火花が散つた。そして機體は黒烟を吐き、火焰となつて、つばさは、眞二ツに折れ、眞直に、大地をめがけてもぐるやうに墜落した。

市街戦はすんだ。

兵士たちは、ぐたぐたに、二日半の休息を得た。酒、一週間吸はなかつた煙草を二日で吸ひ戻した。街路の到るところに支那人の屍體がころがつてゐる。

酸っぱい臭氣！ 無数の唸る蠅。

毛並の房々とした野犬と、乞食が、舌なめずりをしながら、愉快げに、野犬は尾を振り立てて屍體の間をうろくしてゐた。

爆破された無電局の、天に突きささるやうなアンテナ柱は、半分どころからへし折れ、傾き、倒れかゝつてゐた。振りかへる者もなかつた。直す者もなかつた。黒い土のやうな人間が、その下にころがつてゐる頭蓋から脳味噌をバケツに掻き取つてゐた。

不意に出動！

午前四時、疲勞が直り、性慾が頭を擡げかかつた頃である。兵士達は、忽然と叩き起された。

柿本は、支那商館の石の窓口から、とびこむとき、向う脛をすりむいた。沃丁を塗つたあとが化膿して、巻脚絆にしめられる袴下は、傷とすれた。びつこを引きながら整列に加はつた。東の空が白みけかたばかりだ。高さ四丈、幅七間、周圍三里の城壁を攻撃するのだ。リンとした寒い中隊長の號令。

目に見えぬ顔。重藤中尉は、軍刀を摺んで歩いた。鐵條網を丸めて、片方にのけた狭い出口から兵士たちの列伍は、電柱傳ひに行進した。

路は、露で、シツとりとしてゐた。静まりかへつてゐる。歩調の揃つた靴の音ばかりが、ザツクザツクと暗い空へ吸ひ込まれて行つた。S病院の西側には、低い力のこもつた號令で、砲兵隊が、がちやく／＼車輻をゆるがして砲列を敷いてゐた。兵士たちは黙つて進んだ。青みかかつた雲は、東方からさしてくる赤い日の出に、薄紫色に染めぬかれて、ゆるやかに動いてゐた。明るくなる。

墜落した飛行機に棟を折られた民屋は、甲羅をへしやがれた蟹のやうにしやがんでゐた。兵士たちばかり。家に人氣はない。草は人間に踏みにじられて姿も分らなくなつてゐた。

だん／＼高取や、木谷や、那須などの顔がはつきり見分けられるやうになつてきた。でくの坊のやうに、銃をかつぎ、背に、飯盒をつけた背囊を喰ひつかせて歩いてゐた。

戦争の恐怖以外に柿本は、中條の小母が子供を殺され、家がすツかり掠奪され、明日から宿も、食物もない心配で、くしやく／＼してゐた。折角、俺れがやつて來てゐながら、どうにもしてやることが出来なかつた！ 高取らが、でくの坊の馬鹿のやうにして歩いてゐるのにも理由があつた。忍従し

してゐるのだ。

中隊は破壊しつくされた街に這入つた。窓硝子、扉、壁、屋根、すべてが滅茶苦茶だ。籐張りの女の下駄が片脚だけ放り出されて、靴にあたつた。兵士たちは、石の高い頑丈な家と塀とをまわつて、広い荒らされた、草っ原に出た。そこをはずかひに横ぎつた。そして、又、破壊された家ごみに這入つた。縫ふやうに、細い道を折れ曲つた。

太陽は、壊れたぎざぎざの屋根の間から輝かしく、鮮かにぬつと浮び出た。空の方々に散在してゐたきれぎれの雲は、どこかへ消え失せてしまつた。また暑くなる！ ごたくしたすべての物が、強く照し出された。

中隊は大通りへ出た。城壁の外門へ一直線である。外門の上の建物に、青天白日旗が、ひらく／＼と翻つて見えた。

どこかで、何かの合圖が聞えたものゝやうだつた。と、遙か彼方の砲列を敷いてゐたあたりから、砲聲が轟き渡つた。つゞく。空を唸つて、前方で爆發する。それに應じるもののやうに、反對の東の方で、銃聲が連續して起つた。柿本は、膀胱が、びく／＼、びく／＼と顫へた。そして全身で身顫ひ

した。

その時である。中隊の縦列は、だしぬけに、側面から射撃を受けた。中隊長は、耳のすぐ上で、數發の銃聲がバチ／＼とひびいたのをきゝとめた。T病院の二階からだ。柿本もそれをきいた。銃聲は杜絶えた。

「あ、あ、あんなところから不意打ちを喰はして居る！」

特務曹長は、なさけなげな聲を出して、アカシヤのかけにかくれるやうに伏せをした。兵士たちは顔を見合はした。ひとりでに、微笑が口について出た。同時に、彼等は、たまけちやつたやうな中隊長の散解の號令をきいた。

「そら、また、ここへ突ツ込めだぞ。」

高取は、にた／＼意味ありげに笑つて、どつしりとした玉田に云つた。柿本にもそれが聞えた。

「なんだ、何も居れやせんぢやないか。」

玉田は、頸をあけて、二階建の病院を見まはした。それが終らないうちに、右翼は、重藤中尉が先頭に立つて、開き扉を押し割り、着剣した銃を突き出し、クレゾールくさい室内へ突入してゐた。つ

同胞の日本人が惨殺された。掠奪された。天井裏の板一枚まで剥ぎ取られた。と、彼らは、その現象だけを問題とした。そして、一人が殺されたその倍がへしをせずにもられない、憤怒と、情熱と、復仇心を感じた。――感じさせられた。

その憤怒と、その情熱と、その復仇心とが、いはゆる「敵」をやっつけるのに最も重要な要素となるのは、争はれなかつた。

この情熱によつて、彼等は、市街戦で殺された日本人の體を蹴とばした。

何のために、それをやつたか！ 誰れのためにそれをやつたか！

屍

三十

翌々朝、六時。

大陸の焼けつくやうな一日は、既に始まつてゐた。

兵士たちは、マッチ工場の白揚材置場の片隅に整列した。

敏感な重藤中尉は、上官の直視を避けるやうな兵卒の眼つきに注意をとめた。動搖と、士氣の沮喪と、いや／＼乍ら行動する姿え切らないものを彼は見た。前々からの兵卒の間に醸されてゐた××な空氣を彼は感じた。即座に、誰れか、かけにかくれて、何かやつてゐるな！と思つた。

勇敢で、單純で、感情的な重藤は、自分の扱つてゐる兵卒の要求と、本能を直感的に見抜く鋭敏な才能を持つてゐた。

彼は、その自分の感じによつて、兵卒が、上官の眼の行き届かないかけで、何かこそそやつてゐるのを知つてゐた。たちが悪い。明かに信服しなくなつてゐる。高取は、職長を殴りつけて、工人への給料を全額、暴力で拂はしてゐた。それ以來、少くとも、五六人の兵タイは、國家のために出征してゐるのか、工人と一ツとなつて不届き至極なことをやるために來てゐるのか、區別がつかなくなつてゐた。彼は、中でも、特に、高取に最も注目してゐた。なほ、多くの兵士らも、自身から、高取の言説に心をひかれてゐる。それも分つた。それには、理由がなければならぬし、人事をやつてゐる特務曹長もこれに氣づいてゐた。特曹は、支那の共產黨員と、何か共謀して事をたくらんでゐると、重大視してゐた。しかし、重藤は、その點、どうせ兵卒のやることだ、どんなに

したつて、大したことは出来ない、と高をく、つてゐた。

彼は、整列した兵士たちの眼に、動揺と、不平とある意気地なさを見ると、すぐ原因を高取らのこそくに歸した。そして、こんな日に限つて負けるんだ。と考へた。無数の負傷者が出るんだ。大きなくじりをやるんだ！ 彼は顔をしかめた。

高取は、一番最後に、巻脚絆を巻き直して、靴を引きずり、整列に加はらうとしてゐた。彼は高取につめよつた。横合ひから、頬を殴りとばした。故意に、兵士達、皆んなに見えるところでやつた。

「おい、高取、なまけるな！」

「……。」

「お前は、國のために働くのが嫌ひなのか？ そんな奴は謀叛人だぞ。」そして、もう三ツぶん殴つた。

「分つたか？」

「……。」

高取の眼は、眼窩からとび出して、前へ突進して来るやうに燃えてゐた。何のためにいきなりやられるのか譯が分らなかつた。

中尉は、高取の眼が氣に喰はなかつた。ブーンとした態度が満足できなかつた。

「こらッ！ 不真面目にすると、お前のためにならんぞ！」と、彼は唝鳴つた。

「どうしたんでありますか。」

「こらッ！ 高取やめろ！」彼は軍刀をガチャツと鳴らした。「俺は、お前の腹の中を見すかして居るんだぞ。お前のやつとることは、何一ツ残らず知つとるんだぞ。お前は、自分で、何をやつとるかその恐ろしさを知らんのだ。」

「何も、やつて居りはしねんであります。」

高取は、一寸、まごついた。が、すぐ、光つた眼で中尉を見つめた。

「よせ！」重藤は、儼然と云つた。「俺は何もかも知つて居るんだぞ！」

「はい、何ですか？」

償勤兵となつた彼は、これまでも、幾度か殴られた。蹴られた。指揮刀が歪むほどひッばたかれた。彼は、何回となくそれを忍んできた。ほかの者だつて、そんなに異ひはしなかつた。「かうして、この結果、俺らが現にやらせられてゐるのは、何であるか？ 自分で、

兵士たちは、高取を毆るのは、
じた。おどかしにやつてゐるのだ！ 彼等は、顔色が變つた。

敏感な重藤は、正確な晴雨計のやうに、すぐ、それに氣づいた。兵士たちが、色めいて、變に動搖
しだしたのを眼にとめた。もうこれ以上毆りすえては、却つて、籤蛇になる。部隊全體に對して。と
感じて意識した。が、語調の行きかゝりが、意識を裏切つた。高取は、上をむいて何か云はうとした。
中尉はそれを遮つた。

「一體、お前らは、何事を考へだして居るんだい？ ええ？ 一體、どういふことを考へだしてゐる
んだい？」

「ふむ、——苦ろしめられたくはないと云ふんだな。(わざと相手の言葉をこま化した。)……それなら
命令をよく聞け。命令をきまますればいゝんだ。」

重藤は、それ以上、突つこまなかつた。大膽不敵な彼も、多数の前には恐怖した。彼は、兵士たち
の顔色を見見、言葉を切つた。しかし兵卒を扱つて來た経験から、自分の云つた命令が、實行さ
れないかも知れないといふ疑念を、絶対に素振りに出してはいけない。自分の命令は、必ず、確實に
實行されるものだ。と、信じ切つてゐる。さう兵卒に見せる。それが必要であるのを心得てゐた。そ
して、その態度を取つた。高取の態度は、決して、彼に満足と與へるところぢやなかつた。しかし、
彼は、これで、注意はすんだといふやうに、身體のこなしを一新して、整列した兵卒にむかつた。

三十一

兵士は薬人形のやうにバタバタと倒れた。

方振武は頑強に、城内に踏み止まつてゐた。

どんな妨害に抗しても、天津、北京へ、攻めのほらすには置かない意氣を示した。城門はかたく、
なかなか破ることが出来なかつた。城壁が厚かつた。青天白日旗は、いつまでも元氣よく、その中に
翻つてゐた。弱くない。武器も新しい。

✓ 蔣介石は、日本のどんな要求でも容れるから、たゞ、こゝを通過して、天津、北京を攻撃すること
をゆるせ！ と提議した。それが、いれられなかつた。司令官は、満洲が脅かされることを知つてゐ
た。そこで、支那兵は意地になつた。

ほかの部隊が各々、西北角や、泰安門や、新建門を占領して行くに従つて、柿本の部隊の幹部は、
やつきになつて自分の持場を攻めあせつた。バタバタ倒れる者が多くなる。幹部の功名心と競争心は
兵士に重量がのしかゝるやうに出来てゐた。柿本らにも、それが眼に見えて分つた。巻脰解を解くひ
まもない。へとくになつた。つらくつてたまらない。鐵砲の照準をきめながら、フラ／＼と居眠
りをしたりした。

戦友が、どにで、どうしてゐるか分らないまでに、ごたく／＼に入り亂れた。市街は、焼火箸が降る
やうな暑さだ。

アカシヤの青葉が黄風に吹きちぎられ、土煙にまじつて、目つぶしのやうに街を飛んだ。その晩、
青鼠服は、射撃を中止した。兵士たちは、工場へかへつて脚をのぼした。午前二時頃、彼らは、恐ろ
しい夢にうなされた。宿舍の二百人ばかりのつばものが、同時に、息の根をとめられ、う／＼と唸つ

て、現で立ちあがつた。苦るしまぎれに、両手でむちやくちやに空気を引ツかいた。

これは、内地で、早足行進に、どうしてもすねが伸びない初年兵が、教官にボロクソにこづきまわ
されて、古いお城の松の枝で頸を吊つて死んだ。その晩にうなされたのと同じ現象だつた。その時に
も、中隊全部が、息の根をとめられた。唸つた。そして同時に眼がさめた。何と説明していゝか分ら
ない。

「これは、何か不吉なことが起つてゐるぞ。」

「俺れや、自分がしめ殺されたと思ふた。……つらくつて、どうしても息が出来なかつた。」

「誰れか、今、現に、やられてゐる！ 無理、無法にやられてゐる！」

正氣づくくと、彼等は云つた。

「高取はゐるか？ 高取！ 高取はゐるか？ どうも、俺れには、高取が、誰れかと一緒に眼のさき
へやつて来たやうな気がしてならん！」

柿本が、まだ、幻影を見てるやうな顔をして云つた。
冷やツと、身が底へ引きすりまれる感じがした。

翌朝、高取と、那須と、岡本と、松下、玉田が歸つてゐないことが分つた。誰れしも、不思議がりながら、口に出しては、何も云はなかつた。眼と眼でものを云つた。木谷と柿本が、病院の負傷者と屍室の屍體をしらべた。ゐない。夕方になつた。まだ歸らない。翌々朝になつた。まだ歸らない。交代した歩哨は、寢不足と夜露で蒼くなつて、宿舎へ這入つてきた。消息がない。

高取らの指揮者の、重藤中尉は、ひひ猿に頬ツペたをなめられたやうな顔をして、どこからか歸つて来た。室の隅の木谷と柿本は、身に疵があるのに、強てそれをかくして笑ふやうな中尉の笑ひ方に目をとめた。

木谷の直観は、その笑ひ方に、びたりとかたく結びついた。彼は、中尉の心の状態が手にとれるやうな氣がした。

「どうだい、今日は、濶源門の攻撃だぞ……。」

「さうですか。」

木谷は、ご氣嫌を取るやうに近づいてくる相手の疾しけな顔つきに、平氣な、そツけない聲で答へた。

「今日、お前らが、ウンときばればもう落ちてしまふんだぞ。」

「さうですか。」

彼が、何をやつたか、それは、訊ねたつて、訊ねるだけ無駄だ！

柿本は、少し、薄馬鹿で、大まかな高取のことを思つた。あの竹を割つたやうな、愉快な奴が、どこへ行つたのだらう。薄馬鹿のやうで、本當は、決して馬鹿ぢやなかつた。工人達に、眞ツさきに接近して行き出したのも高取だつた。友達のやうに仲がよくなつてしまつた。日露戦争や、日清戦争には、兵士達は、國を守るために、命を投げ出した。今は、居留民の生命財産の保護に命をかけてゐる。しかし、そのいづれもが、眞赤な嘘である。それを、眞ツさきに云ひ出したのも高取だつた。

「實際、俺れらにや、なんにも、支那人をやつツけることばかりしかやらせやしないぢやないか。」と高取は云つた。そして、柿本に、親しけな、同感をよせる態度で普利門外のおばさんの家は、どうなつたかと訊ねた。

その時、柿本には、まだ、おばが、文字通りに着のみ着のまゝで銀行に避難して、五ツの娘は、

殺されてゐた、ことは分つてゐなかつた、地下の秘密室にかくして置いた銀貨まで、あとで歸つてみるとなくなつてゐた。それも分つてゐなかつた。」

「普利門は、一番、被害のひどかつた方面ぢやないか。」

「さうらしいんだ。まだ、見に行くことも出来ねえんだ。」

「俺等は、何のためにこゝへ來とるんだね？——折角やつて來て、自分の肉親さえ、保護することも見ることが出来ねえつて、……身體だけでも無事でゐて呉れ、ばい、がね。」

「うむ、氣にかゝつて仕様がななんだ！」

「俺等が、わざわざこゝまでよこされて、本當の親があるとしてもだ、その親を守ることさえ出来ななんだぞ。……これが真相だよ。これが現在の、我々の置かれてゐる位地の眞實の姿だよ。大金を持つてゐる奴等だけしか守られはしないんだ。そのために、俺等を犠牲にすることは、いくら犠牲にしたつて、なんとも思つちやらないんだ。」と高取はつゞけた。「こゝで、工場を守らしながら、工人は、いぢめつける。南軍は、追ッばらはす。満洲の利益は、ちやんと、これで確實に握りしめて置かうと考へてゐるんだ。満洲が、奴等にとつちや、一番大切なんだからね。俺等は、月七圓かそこらの俸給

を貰ふだけだよ。そして生命は、只で大ッびらに投げ出してゐるんだ。利益は何にもあれやしない。

内地へ歸れば、やつばし稼がなければ、金は取れやしないよ。満洲の防壁となつてやつたつて、生涯、遊ばして食はしちや呉れやしめえ。……實際居留民の保護だけなら、何故、こんな不便な、きたないマツチ工場の南京蟲がうよくしてゐる寄宿舎に入れて置くかね？ 小學校だつて、居留民だつて、KS俱樂部だつて、もつときれないな、大きい建物がいくらでもあるんだ。そして、そつちの方が便利なんだ。それを、工場に置くのは、工人を壓へつける爲めと、工場を守らす以外に、どこに理由が見出されるかね。」

柿本は、高取の放膽な話し振りに似ず、しみじみとした心持になつた。

「俺らが支那にちよつかいをかけさせられて、工人や百姓の運動を、邪魔すれや、邪魔するほど、俺れらの内地の暮しが苦しくなるんだ。」また高取は、そんな話もした。「支那を弾壓してニコくしてゐるのは大金持だけだよ。大金持は、それで、又、金を儲けら。……金を儲けれや、その金を使つて内地で俺れらをからめ手から押しつけるんだ。どつちにしたつて、支那の連中に大いにやつて貰はんことにや、俺れらの仕事もやりにくいんだ！」

その高取がなくなつた。

柿本には、最後の言葉だけは、まだ、意味がはつきり分らなかつた。

幹部は、城内に頑張つてゐる南軍よりも、土匪よりも、アメリカ人よりも、猿飛佐助のまく博覧や高取や、工人たちと一つになつた兵士の赤化を一番に、氣にやんでゐた。それを一番怖がつてゐた。それは争はれなかつた。

三十一

この日、また、死もの狂ひの猛烈な攻撃が試みられた。

午後三時、柿本は、ゴミの中で城壁のかけから飛來した弾丸に肩をうちぬかれた。一群の負傷者にまじつてトラックに揺られ病院に來た。

負傷兵は、どの病室にも、いつばいにあふれてゐた。擔架にのせられ、歩ける者は歩いて、あとからどんくどんく這入り得るだけの密度で、病室につめこまれる。外科病棟は、びつしりとなつてゐた。内科病棟と、傳染病棟の一部にも、負傷者は這入つてゐた。

柿本が入れられたのは、支那人を追ひ出した、支那人への治療病室だつた。白ベンキが禿けた鐵寢臺、汚點だらけの薬布團、膿くさい毛布。敷布や、布團蔽ひはなかつた。普通の病室よりは悪かつた。煎りつくやうなのどの乾きと、傷が生命を奪つて行く、それとの戦ひ、疼痛などで、病室は、檻のやうなわめきで、相應呼してゐた。

各部署の戦闘のはげしさは、負傷者の數と、思ひ切り無遠慮なその負傷ぶりによつて完全に表現されてゐた。

「砲兵の榴散弾で、城門近くの歩兵がやられて居るんだ。照準が間違つて居るのにめちやくちやにうつて居るからだ。味方の頭の上で味方の弾丸が炸裂してゐるんだからな。」

負傷者を運んできた擔架卒は、ベッドの脇で、にがくしけに呟いた。

「南軍の遺棄した弾丸を使つてゐるちゆうぢやないか。」

「ふむ、さうかもしれない。そんなことをするから着弾が狂つて、味方の砲兵が、味方の歩兵を殺すんだ。」

「チエッ！ そんなこともあらうかい。もともとろくでもねえ戦争だ！」

一ツのトラツクの負傷者が、それぞれベッドに運ばれて、一時擔架卒のたぐい出入する靴音が消えたかと思ふと、まだ軍醫の傷の手あてが、みんなの三分の一にも行き渡らないうちに、次のトラツクが院庭へ唸りこんできた。又、擔架卒が、靴音をばたくと、重い負傷者をついで這入つてくる。

「□×が一等、やられる者が多いぞ。もはや、戦死が九人。——聯さんが抜けがけの功名をあけるとあせつてゐるからだ。」新しく柿木の傍のベッドへやつてきた擔架卒は、太い低聲で、運んできた負傷者に喋つてゐた。「幹部の功名心は、俺等を踏み臺にしなげや逸けられねえ性質を持つてゐるんだ！旅順攻撃にだつて、屍の山を積んだんだ。それで、一人の大將が、神さまに祭られてら！」

柿木はうすくきいてゐた。

□×とは、彼の聯隊だつた。見ると、ベットに移されてゐるのは、中隊の黒岩である。ズボンを取つて脚にくくりつけた三角巾が、赤黒くこはばつてゐた。彼等は、隊長の功名心や、ほかの部隊との競争心から、むやみの突撃、前進を強ひられてゐた。見すく傷つき倒れる。××氏大隊□□占領！△△氏中隊どこそこを奪取！この報知に虚榮心を燃やされるのは「長」がつく人間だつた。

「無理をするからだ。誰れにだつて出来ねえことを、一息でやつて見せようと見榮坊を張つてやがるんだ！」

黒岩は、傷の痛みを感じるよりも、神経が立つてゐる話し振りで話した。

「どこの部隊だつて、兵タイにや、最大限度の馬力をかけさしてゐるんぢやないか？」

と、柿木は、ふいに、横から云つた。

擔架卒は、ちよつと黙つて不思議げに彼を見た。黒岩は、柿木だと知ると、口もとに、笑ひのかけを浮べた。

「さうかもしれんて。」

「さうだよ、さうにきまつてゐるよ！この數しれん負傷者は、——戦争は、隊長の功名心の競争場だよ。さういふ風に出来てゐるんだ。それで支那兵は、徹底的に追ッばらつてしまふさ。俺れらは、隊長の踏み臺にせられて手や脚を落ささ。ははは、隊長は隊長で、その功名心に、又、もうひとつ上からあふりをかけられてゐるんだ。勳章といふね。上にや、上があらあ。」

「その一番下は俺らぢやないか。」

「うむ、その俺らの上によ、重い石が、三重も四重もにのつかつてゐら！ 畜生！」
 のんきな軍醫は、兵士の苦しみや、わめきや、唸へきれなくつて手足をばたく／＼やるのが快よいもの、やうに、にこ／＼しながら、平氣で處置をつ／＼けてゐた。血糊でへばりついたシャツを鉄で切つた。

「一將功成り、萬卒倒る、か。」

兵タイの不平を小耳にした彼は、詩吟の口調で、輕るく口ずさんだ。

柿本は、その軍醫の手あてを受けた。そして、白い、新しい病衣を着た。

城壁は、翌日、午前中、陥落した。ベットに坐つて彼はそれを聞いた。傷の疼痛は、だん／＼に少

くなつた。肩の負傷は、歩くことには一向差支なかつた。三日目に、木谷と山下が見舞に來た。

「おい、柿本、どうだい。」木谷は、男性的な濫い聲で叫んだ。「高取らがやられてゐたぞ！ 五人とも

黄河の河畔で、犬に喰はれて白骨が出てゐた。」

多分そんなことになつたらうとは感じてゐた。が、現實にそれをきくと、柿本は、ぎくツと心臓

が突きのめされた。

「さうか、やつぱしさうだつたか。あの晩にうなされたのは、だてや、冗談ぢやなかつたんだな！」
 「今、五人とも、屍室へ運んできてゐる。」

「一體、誰奴にやられたんだ！」黒岩が云つた。「誰奴がやりやがつたんだ。犯人は、はつきり分らんか？」

「黙つてゐろ！ それをきいたつて無駄だ。」木谷は、嚴肅なそ振りて手を振つた。「云はなくなつて分つてゐる。あいつだ！」

「あいつて？」

「あいつだ！」

暫らく彼等は無言でゐた。

傷つた肩から玩具のやうにブラさがつてゐる片腕を、三角巾で頸に吊つて柿本は、木谷らと、屍室へ歩いた。大腿骨が碎けた黒岩は動けなかつた。院庭から見える市街は荒廢し切つてゐた。踏み折られて泥にまみれた草は、それでも、又、頭を持ちあげようとしてゐた。アカシヤは、風にもかゝはらず、なほ一層青々としてゐた。屍室には、看護婦や、患者や、兵士や、街の人々が、入口と窓の

外に、黒山のやうにたかつてゐた。五人の、犬にしゃぶられた遺骸を見やうとつまさきで立ちあがつてゐる。

高取たちは、もう、暑さで腐爛してゐた。酸っぱい鼻もちのならぬ腐肉の臭ひと、線香の煙がもつれあつて、嗅覺を打つた。どれが高取だか、那須だか、玉田だか分らない。白布で蔽ふてあつた。殺されたまゝ放任されてゐたのだ。捜索隊が行くまで、毛のむくくした野犬どもが集つて、舌なめずりをしながら、しゃぶつてゐたさうだ。

「この肉體のどこから、俺等をうなしに來たんだらう？」

山下が、いぶかしげにきいた。

「それや、何か分らん、俺れにや、どう説明していゝか分らないよ。」と木谷が云つた。「しかし、奴等は、俺等の武器が奴等にむかつて突ツかかつて行くのを怖がつて、先手を打ちやがつたんだ！ あいつらの利益を守るためには、あらゆるものを犠牲にしてかへりみないのだ！」

三人は、芝生の土手を越して、塹壕のある草ッ原に出た。大きなアカシヤのかけには火葬場が作られてゐた。

「俺れらだつて、ひとつまちがへば、やられてゐたかもしれないんだ。」と、木谷は、塹壕をとび渡つて小聲で云つた。「あいつらは俺らが怖いんだ。だが、今度、俺等が劍を持った日にや、先手を打たれやしないぞ。まづ、あいつらの心臓を串さしにしなければ置かないんだ！」

三十三

—後記—

半分しか肉がついてゐない五名の兵士は、「名譽の戦死」といふことになつた。

棺に納められ、石油をぶつかけられた彼等の肉體は、火葬竈の中で、くさい煙となつて消えて行つた。

内地の彼等の親たちは、本當に、彼等が、憎むべきチャンコロの彈丸にあたつて戦死したものと思ひこんでゐるだらう。

出兵の結果、支那には、排日、反帝國主義運動が、かへつて強くなぎつた。破壊しつくされた瀧源門には「誓雪此恥」「你看見麼？」「你記得麼？」と、民衆の心に火をつけてゐる。しかし、日本ブル

ジョアジールは、出兵當初の目的とした「滿蒙殖民地の確保」は、一時的にせよ、殆んどそれを達成した。喰へない男、張作霖の爆死や、蔣介石と結ぶ揚子江の銃殺などによつて。日本のブルジョアジールは、武力によつても、滿蒙を握りしめ、完全に、それを屬領化しなければならぬやうになつてゐる。そのために、あらゆる力を、そこに傾注してゐる。これは、やがてアメリカとの對立を鋭くし、必然、帝國主義戦争を捲き起すともなるだらう。

福隆火柴公司の工人達は、その後立ちあがつた。——これは、あまり筋書き通りになりすぎるが、事實立つた。社宅の女房達は、又、いつかのやうに自動車でKS俱樂部へ逃げ出した。そして、彼女達は、永久に社宅へは歸らなかつた。

それから、最後に、猪川幹太郎は、ドサクサ騒ぎに、家も、仕事も、子供も、すつかり失つてしまつた。彼は、マツチ工場を譲になつた。

一郎は、どこで、どう失はれたか、皆目分らなかつた。恐らく支那人にツマミ殺されたのだらう。彼は、それを残念がつた。トシ子によく似た子供を失つてしまつた。それが惜しかつた。しかし、また、一方、殺されたなら殺されたつていゝとも思つた。

だが、ある日である。

彼は、以前の住居の十手殿附近をブラ／＼歩いてゐた。破壊のあとはまだ恢復してゐなかつた。街は、一層きたなく、ホコリッほかつた。支那人が生大根の尻ッボをかちつてゐた。

「爹呀！ 爹呀！」

ふと、彼の足もとへ近づいて來る者があつた。汚い支那服を着た子供だつた。頭は支那の子供のやうに前髪と、ピンチヨを置いて剃られてゐた。

「爹呀！ 爹呀！」

よち／＼とその子供は、遊んでゐるほかの子供の仲間から離れて歩いてきた。見ると、それが一郎だつた。

馬貫之の細君が、辻の枝が裂けたアカシヤのところ立つてゐた。彼は、思はず、子供を抱きあげた。

一郎は、馬貫之に助けられてゐたのである。

武装せる市街終

昭和五年十一月十日印刷

武装せる市街

昭和五年十一月十五日發行

定價五十錢

著者 黒島傳治

發行者 鈴木貞
東京市麹町區九ノ内二ノ一八

印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

印刷所 共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町一〇八

發行所

株式會社 日本評論社

東京・丸ノ内・昭和ビル 振替東京一六 電話九ノ内(25)

四一三一
四一三二
四一三三

新作家長編小説選集

支那から手を引け	武装せる市街	女工戦	異國の戦争	魚河岸	暴動	砂糖 <small>近刊</small>	陰謀	燃える森林 <small>近刊</small>	稚き闘士	或る時代の群像
前田河廣一郎	黒島傳治	今野賢三	小牧近江	金子洋文	伊藤永之助	細田民樹	細田源吉	平林たい子	葉山嘉樹	青野季吉

各册十五銭・本日評論社版・三四六頁判

終